

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494



このビー玉は浮き…。30分の1の模型を囲み指で“乗船”する (5月22日・埼玉県立盲学校)

開設十七周年に当って

第五福竜丸展示館への設立以来の通算来館者数は、本年三月、二〇〇万を突破しました。一〇〇万人に達したのが設立一四年目の一九八九年二月でしたので、この四年間に新たに一〇〇万人が訪れたことになりました。また、年間来館者数でも一九九二年度にはじめて三〇万人をこえました。

折しも明年(一九九四年)三月一日はビキニ水爆実験被災事件の四〇周年に当たります。私も第五福竜丸平和協会では四〇周年を記念して、ビキニ事件の今日的意義を考えるためのシンポジウムを二月に開催する準備をすすめています。

最近の学校からの団体見学の特徴は、事前の学習を充分におこない、見学当日も生徒たちの作品を持参するなど、感銘深い見学となるよう見事な工夫がなされていることです。私も、生徒たちにとって見学の効果が質の高いものとなるよう、いっその努力をおこなうつもりです。

第五福竜丸との対面をとおして平和の尊さを知っていただくことが基本ですが、同時に、ビキニ事件とのつながりで核についての正しい理解をもっていたいただくことも大切だと思えます。

最近わが国の若い人びとの間にも「数字(数字)・アレルギー」が広まっているといわれています。いま私たちはいろいろな大きな数字に取り囲まれています。核兵器の効果・被害と関係して出てくる諸数値も今日では、気の遠くなる数字として敬遠したり、ただ漠然と「巨大なもの」とイメージするのでなく、その数値のもつ正確な意味を理解してほしいと思います。そのためにはそれなりの学習と訓練が必要ですよ。

地球上で核兵器を爆発させることは、もとより許されることではありませんが、核反応や核エネルギー自体は、宇宙の誕生、銀河の形成、水素から複雑な元素が合成され、ついには人類が出現するにいたる過程、言い換えれば、私たちがいまこのような姿で存在することも、深いところではかかわっているのです。この瞬間も、太陽の核エネルギーによって地球上の生命は支えられています。

ビキニ事件や第五福竜丸をとおして高校生や若い人びとに学んでいただきたい事柄は実に多いのです。

## 乗組員の手記など寄贈——元東大病院の看護婦さん来館

「焼津にいった見崎吉男さんにお会いしてきました。港や魚市場にも案内して下さいました。」

五月二十八日、ビキニ事件当時東大病院特別内科で七名の乗組員の看護にあたった看護婦さんの原科(旧姓吉原)富喜代さんが来館されました。

「あ、これは見崎さんのお子さん、こちらは鈴木鎮三さんに服部竹治さん…これは私」

大切に保存されていた東大病院のベッドで語り合う乗組員の皆さんの、もうセピア色になった写真。病院で綴られた見崎さん、山本忠司さん、増田三次郎さん、高木兼



「おじいさんの船に会いました」

第五福竜丸誕生のふるさと和歌山県から、今年も五十校余の中学校が修学旅行で訪れましたが、五月十三日来館した古座中学校三年生四十二名の中に、船を造った大工さん南藤藤夫さんの孫になる南藤百合子さん(おじいさんの造った船)の下で記念撮影(左から一人目)。「第五福竜丸のことはみんなで一けんめい勉強しました。おじいさんは元気でいまでも船を造っています」とうれしそうでした。同じ中学の一年生である弟さんも来年には船に会いにくるとか。

重さん、安藤三郎さんの、色褪せたガリ版刷りの手記を、ひとつひとつ丁寧に開いて渡され、原科さんの日記が載った当時の「婦人朝日」なども贈られました。

「もう四十年近くにもなってます。でもはつきり覚えてます。みんな生きようと懸命でした」

五月中旬、同僚だった山崎京子

## 小さなタイトルの平和メッセージ——和歌山県富田中学校

自分を見つめる肖像画、未来の地球を考える想像画など、毎年ユニークな平和のメッセージを携えて来館する和歌山県の富田中学校。今年も全員がハセンチ大の小さな

と共に焼津に出かけ、見崎さんを訪ねなつかしさに涙したこと、同じ看護婦さんだった増田さん、山本さんの夫人に電話し励ましあったことなど話され、第五福竜丸をいつくしむようにながめ「気にかかっていたものをお渡しできてほしかったです」と語る原科さん。いまも現役で東京郊外の特別養護老人ホームで忙しく働いておられます。

青いタイトルを一枚一枚大事に手にして来館しました。縦・横十三個づつ、合計一三九個を正方形に並べると、青い地球に鳩と鶴が飛び、PEACE FOREVERと文字が浮かびあがります。

第五福竜丸の船腹の下の机に広げられた下絵に、一人ひとりが決められた場所にピースづつ置き、完成したレリーフをながめつつ見学しました。

前年度見学した卒業生から引き継がれたもので、学習し、みんなの色を塗りタイトルを焼いたのことに。第五福竜丸の姿もみんなの胸に強く焼き付いたことでしょう。

五月二十二日には、埼玉県立盲学校の生徒十名が来館、今年も盲導犬も一緒に来て案内し、大石



139枚のタイトルで訴える平和メッセージ

又七さんの作った模型の船を先生の説明を聞きつつ指先でたしかめ(二面の写真)、本物の船の回りをゆっくり巡って全身で第五福竜丸をつかみました。

六月五日、展示館前広場で日本青年学生平和友好祭東京実行委員会主催の「反核平和の火リレー」の到着集会が開かれ、五月二十六日、横田基地からマラソンで引き継がれた「平和の火」が第五福竜丸展示館に到着しました。

協会理事會開く

五月二十六日、協会の第一二二回理事會が学士會館で開かれ、一九九二年度の事業報告、決算等を承認しました。また、顧問・評議員の選出について審議しました。

●連載 1-2

### NPT延長会議での日本のイニシャティブ

森 一久

一九九五年(平成七年)は、終戦五〇年、ヒロシマ・ナガサキからも五〇年という大きな節目の年である。旧ソ連の崩壊に端を発して、想像もしなかった混乱のつぼの中で、世界は新たな秩序を模索しつつある。次の五〇年、また二十一世紀はどんな時代になるのか、にわかに予測もつかない。でも、日本の立場は半世紀前とは全く違ったものとなっており、国際的な重要問題について、従来のような大勢順応ないし大国追随の対応ではすまない時代となった事は、はっきりしている。

さて、核兵器問題がその一つであることはいまでもない。米ソの核兵器解体問題等、東西対立の解消から生じる複雑な問題もあるが、核兵器不拡散条約の延長の可否を審議する国際会議が二年後に迫っている。すでに準備会合も開かれ、日本の態度が注目されている。

成功し、また(日本を含め)西欧先進国が平和利用に積極的に取り組むその国際取引も活発化し始めた時、米ソ両超大国は、これ以上核兵器国が増えることに大きな懸念をいだいた。両国は部分的核実験禁止条約(一九六三年)の締結などで核軍縮の態度を示す一方、一九六七年一月一日現在の核兵器国、米英ソ仏中の五カ国以外の国にたいして核兵器等の開発・製造、受領を禁ずる、二五年存続の「核兵器不拡散条約(NPT)」を提案、これが一九七〇年成立し、いまでは百五十八国が参加している。そして明後年、一九九五年四月には、NPTをこの内容のまま「無期限に延長するか、ならんか期限をつけるか」を過半数で定める総会が開かれる。そして、今のところ、核兵器国五カ国を含め先進国の大勢は、「無期限・無条件の延長」であり、日本もこれに同調するよう求められている。

分して議論されたときの問題点、また五年毎に開かれた「再検討会議」で俎上につけてきた(条約そのもの或いは履行上の)主な論点を整理すれば、次のようになる。元々核兵器が、大戦争の抑止力であったか、また将来もありうるか、の根本問題は別として

- ①核兵器国には核軍縮の努力という点
- ②非核国が核兵器国から受けうる脅威に対する安全保障がない
- ③非核国のみが受ける平和利用への全面的な査察などの負担
- ④(結果的にNPT加盟国でも)受ける平和利用への制限(軍事にのみならず易い設備や技術)

最近、核兵器国間の軍縮の話合いが進み、米ソは核兵器の一〇分の一への削減に合意している。それでも、各三千発は残り、他の三国も核兵器は依然として「抑止力として必要」という態度を崩していない。過去五回の再検討会議の都度またその前後には、いくつかの対応(核兵器国も一部平和施設の査察を自発的に申し出る、核実験の一時停止など)がとられたが、一方、前記③、④はむしろ強化されてきた。それでもなんとか

今日まで、NPTは一定の役割をみとめられ、加盟国も増加しつつ存続してきた。しかし、第三世界の国々を中心に、条約の内容には不満が鬱積しており、ここ数年の国際的な力関係の激変からも、八〇国もの賛成を必要とする、この延長会議の成り行きは予断を許さないものがある。

化学兵器や生物兵器は非人道的なものとして禁止の国際条約があるのに、原水爆については、NPTを無条件無期限に延長して、一部の国のみその所持を永久に認めるとするのは、やはり筋が通らなであろう。その上、現在NPTに参加せず問題視されている国に、不参加の口実を与え続ける事にもなる。

確かにNPT条約は「ガラス細工」のような、種々の矛盾を精緻にコンプロマイズした条約であり、うっかり条文の改正に手をつける、世界の核不拡散体制を元も子もなくする恐れがある。

しかし、核兵器というものが人間にとって何であるか、最もよく識る日本がいまこそ、将来の世代に恥ずかしくない、何らかのイニシャティブをとるべき重要な時にあると思う。

(第五福竜丸平和協会評議員)

### 子どもたちの活力と自発性を生かして

沼里 由紀子

北陵中学校は盛岡市の北西のはずれ、隣接する滝沢村との境にある県下有数のマンモス校です。近年、生徒数がやや減少傾向にあるとはいえ、現在も千人近い生徒数で、一学年八、九クラスもあり、教職員も五〇名近くになります。朝な夕な、季節ごとに変わりゆく雄大な岩手山を校舎のどこからでも眺めることが出来ます。市街地からやや離れた新興住宅地に今から二〇年ほど前に建てられたこの学校でも、今から十年程前、荒れる中学校の波がおしよせ、生徒指導に大変苦勞をしたという苦い経験がありました。

先生方は勿論、地域の方々も懸命にたて直しに取り組んだと聞いています。その方策は生徒の活力や自発性を最大限に生かす方向で探られ、「部活動と行事に力を注ぐ」という現在の本校の基礎がつけられました。

それまで行われていた北海道への修学旅行も見直しと検討が行われ、「平和学習」を中心にすえた東京方面の旅行に変わりました。

今から七年前のことです。当時その企画にたずさわった先生は転勤でもう残っていませんが、第五福竜丸展示館の見学は当初から一貫して引き継がれてきたメインテーマです。その年々の学年のスタッフの構成メンバーによって取り組み内容に若干の違いはあっても北陵中学校に学んだ生徒の約三分の一、二千五百人以上の子ども達が福竜丸を見、館の方のお話を聞いてきたのです。

この「平和」な時代になぜ戦争について考えさせることが必要なのか。なぜ第五福竜丸を通じて「核兵器」の恐ろしさを教えるのか。教師の中にも様々な考えや受けとめ方の落差があります。しかし七年間、受け継がれてきたという事実の中に、子ども達に何を学ばせ何を考えさせたいかの共通の思いがあったことに意義があるのだと思います。

私は社会科の教師ですので、教科の学習の中でも「平和」のテーマを時々の教科の学習の中で直接話す機会に恵まれています。今回

は、二年生の時に地理学習で「沖縄戦―渡嘉敷島の集団自決」と「平和都市・広島」を扱いました。三年生になり、四月に丸木美術館の「原爆の図」につけられている文章を、原爆投下時のすさまじい様子について子ども達と共に息をのむ思いで読みました。

五月の連休明け直後の修学旅行でした。館の方のお話、特に「核兵器の現状と恐怖」について、ほとんどの生徒には予備知識がなくて驚いたようです。

「僕は歴史が好きで第二次大戦がいかに激しかったかという事を知っています。(水爆の威力が)その大戦で使われた爆弾の二・五倍というのは、とても想像できません。今核戦争がおれば、地球は破壊してしまうでしょう。これからもたたくさんの人達に平和を訴え続けてください」(感想文より)

夜には大石又七さんにおいでいただき、被爆の体験やなぜ多くの人が訴える決意をしたのかをうかがいました。「私は話が下手なので……」と何度も途中で言われながら話された大石さんのお話を聞いて、ふだんおとなしくて目立たない男子生徒が次のように感想を書いています。「……大石さんのお話によって水爆の恐ろしさがよく

わかりました。大石さんのお話を聞く前までは、原水爆の話を知っていませんでした。しかし大石さんの話や、第五福竜丸の姿を見て、本当だったんだな、という気持ちになりました。被爆する時の状況を聞いた時は、水爆の恐ろしさが身にしみてわかりました。久保山愛吉さんの死は水爆の恐ろしさを全国民に教えるような死だったと思います。原水爆の実験がアメリカだけでなく世界各国で行われていると知った時は驚きました。そして放射能によって病気になるそして確実に死んでしまうという被爆後の被害も大変だということがよくわかりました。……」

体験した人でなければ語れないこと、その訴える力のすこさ、普段、授業を通じて話すことを仕事としている教師であるからこそ、一層強く感じます。

六月になり、生徒は目前にせまった市のスポーツ大会にむけ暗くなる時間まで練習に熱中しています。私は大石さんからいただいた「死の灰を背負って」の中の、被爆者の涙のページを授業で紹介しながら、基本的人権と日本国憲法の学習に取り組み始めています。

(北陵中学校教諭)